

Title	『ダイナミック』総目次と解説
Sub Title	The contents and comments of the "Dynamique"
Author	中村, 勝範(Nakamura, Katsunori)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	1976
Jtitle	法學研究 : 法律・政治・社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.49, No.12 (1976. 12) ,p.33- 54
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	資料
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19761215-0033

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

資料

『ダイナミック』総目次と解説

中村勝範

一、『ダイナミック』解説(1)

発行編輯兼印刷人を石川三四郎とする『ダイナミック』が共学社(東京府多摩郡千歳村八幡山⁽¹⁾)から創刊されたのは、昭和四年十一月一日であつた。A4版(横約十九・五種、縦約二十五・五種)、四頁建、月刊のリーフレット『ダイナミック』は、昭和九年十月一日発行の第十九号をもつて廃刊された。その間、休刊は昭和九年八月の一回だけであつた。第五号(エリゼ・ルクリュ号)が八頁、第五十九号(終刊号)が二頁であつたが、そのほかの号は四頁で通した。毎号約千部が発行されたようである。

石川三四郎を三省堂編修所編『コンサイス人名辞典・日本編』(昭和51年3月)により左に紹介する(八一頁)。

いしかわさんしろう 石川三四郎 1876~1956(明治9~昭和31)明治

『ダイナミック』総目次と解説

大正・昭和期の社会運動家・無政府主義者。④生家は五十嵐姓、のち徴兵忌避のため石川姓を名のる。⑤埼玉県。⑥号を旭山。⑦東京法学院(中央大)。堺利彦・花井卓蔵の紹介で万朝報社に入社。1903(明治36)幸徳秋水・堺利彦らが非戦論を主張して同社を退き平民社を結成、週刊『平民新聞』を創刊するとそれに参加。⑧平民社楼上で日本最初のメーデー集会として5月1日茶話会を開く。平民社解散後キリスト教社会主義の立場から安部磯雄・木下尚江らと『新紀元』を創刊。⑨『新紀元』と西川光二郎らの『光』が合同して堺・幸徳・西川らと日刊『平民新聞』を発刊。翌年、同紙掲載記事が朝憲素乱罪として起訴され入獄。大逆事件後、13(大正2)日本脱出、ヨーロッパを放浪し18帰国、19再び渡欧、翌年帰国。自由連合派の労働運動、黒色青年連盟に係わり、また下中弥三郎・中西伊之助らと農民自治会を創設。戦後、15(昭和21)日本アナキスト連盟結成に参加した。⑩「消費組合の話」1905、「哲人カアペーター」1912、「西洋社会運動史」1913、「社会美学としての無政府主義」1932、「わが非戦論史」1956、「自叙伝」全2巻、1956。

『ダイナミック』は、右の(1)とき生涯を歩んだ石川三四郎の昭和四

年秋から昭和九年秋頃までの約五年間に発行された個人誌である。石川の個人誌ではあるが、石川以外の者も執筆している。主なる執筆者は、望月百合子⁽⁴⁾、生田春月、中西悟堂、西村陽吉、江渡狄嶺、小川未明、新居格、尾崎喜八、岡本潤、椎名其二、上司小劍、奥谷松治、中村星湖らがいる。読者の中には加藤一夫、高群逸枝、村上信彦、長谷川光二、木村荘太、島中雄三、和田伝、吉江喬松らがいる。

石川が、『ディナミック』を定期的に出すことにしたのは、「自分が書きたい」からであつた。

「読んで頂きたいのは山々であるが、併し私の第一の要求は、自分が書きたいのである。翻譯に逐はれて忙がしい中にも、時々『書きたいな』と思ふ感想などが浮ぶ。裏の畑で果樹などを眺めながら『面白いな』と感ずる様な思想が湧いて来る。然るにそうした思想や感情は何時もちつと、直ぐに他の仕事の中に消え去つて、再び捕捉し得なくなる。そこで、こんな小さなものでも、定期的に出すことになつてゐれば、自然に時々感想などもノートとして置く様になるだろうと考へた。だから此小紙片は私のノートを保存する積りで、印刷するやうな訳なのだ⁽⁶⁾」

石川は大正二年三月、日本を脱出した。帰国したのは、大正九年十月である。約七年数カ月、ヨーロッパ諸国を放浪したのである。

その後、いまだ一度、ヨーロッパへ渡るが、大正十二年早春に帰国している。石川は『ディナミック』第二号において「断然沈黙の百姓生活を積りで欧羅巴から帰つて八年になる。そして段々自分か

ら進んで此んな紙片まで出す様に変はつて来た。動いたり、動かされたり」と、『ディナミック』を発行しだした時の心境を書きとめて⁽⁸⁾いる。単なるノートではなく、積極的に書きたかつたのである。

『ディナミック』を出すまで百姓生活に専心していたわけではない。創刊当時の石川はオーギュスト・コントの『実証哲学』の翻譯に打ち込んでいた。「朝は早くより夜はおそくまでと云ふより、全精力を傾注して、時々裏の果樹園に鉄を持つて見廻るか、来客に応接される外はすべて翻譯のペンを取つてゐられた。そして翻譯される中で持に面目と思はれた処を、食事の時など皆によく話された。(中略) そんな時などは石川さんは自分の思索の結果をまとめた欲望が燃へて、翻譯の仕事をされることもどかしく感じてゐられる様に見えた。『自分の考えをまとめるためにノート代りにリーフレットを発行しよう。そして、毎月義務的に書かなければならない様にしよう』と云ふ様なお話でリーフレットの創刊を計画された⁽⁹⁾のである。『実証哲学』を翻譯していく過程において、書きたいという、おさえることができない、内的な要求がたかまつてきたのである。

『ディナミック』という誌名は、オーギュスト・コントの("Dynamique Sociale")から気づいたと石川は⁽¹⁰⁾いうが、奥谷松治の証言は誌名の意味と、これを創刊する時の石川の意気込みを生き生きと伝えている。奥谷は、「或る朝皆で食卓につくと石川さんは希望に満ちた言葉で、『リーフレットの題名は、フランス語で、ディナミックとしよう。そして、社会革命の力学的理論、云ひ換へれば解放の

哲学を組立てようと思ふ」と話された⁽¹¹⁾と書き残している。

三度、石川は渡欧を決心し、昭和八年(一九三三年)十月十六日、神戸を出港する。ヨーロッパへ行く寄り道として中国へ寄つたのであるが、ここで中国文化に魅せられてしまい、渡欧をとりやめ、中国研究に没頭するために昭和九年(一九三四年)一月下旬、帰国した。

石川は中国研究の成果を『ダイナミック』に二、三掲載したが、もはや時事問題は論じなかつた。「保証金が無くなつたので時事を論ずる訳に行かない。自然題目を制限される」のであつた。最終刊号は二頁であつた。「健康状態や経済状態を考慮して一先づ休止する」のやむなきに至つたのである。

『ダイナミック』には写真、絵類がきわめて少い。掲載されている場合は、註においてその旨、明らかにしておいた。広告は原則として総目次にいれなかつた。

- (1) 現在の東京都世田谷区船橋町である。(土に還れ) 唐沢隆二個人誌『柳』第一巻第九号・昭和三十年八月)
- (2) 北沢文武『帝力、我に何かあらんや——石川三四郎の生涯と思想・完結篇——』(一三七頁) 鳩の森書房 一九七六年四月)
- (3) 号は旭山のほか不頁がある。旭山、不頁の由来は唐沢隆三「石川不尽の『悲母観世音』」(『柳』第三巻第七号・昭和三十三年七月) にくわしい。
- (4) 北沢文武氏は前掲書において『ダイナミック』の「実質上の編集者であつた望月百合子」(一三九頁)と書いておられる。
- (5) 読者からの通信は、「同志通信」、「遠近の友より」、「誌友通信」、「反

『ダイナミック』総目次と解説

響」、「誌友近況」等に掲載された。

- (6) 「読んで下さる方へ」(第一号)
- (7) 唐沢隆三氏は、石川の再度の渡欧そして帰国が石川の書いているものでも食い違いがあり、断定できないことを述べられている(『石川三四郎書簡集』について(7)) (『柳』第四巻第四号・昭和三十三年四月)
- (8) 「千歳村信」(第二号)
- (9) 奥谷松治「創刊前後の追想」(第四十九号)
- (10) 前掲「読んで下さる方へ」
- (11) 前掲「創刊前後の追想」
- (12) 「千歳村信」(第五十五号)
- (13) 「千歳村信」(第五十九号)

二、「ダイナミック」解説Ⅱ

革命の力学的理論、解放の哲学を組み立てようという意図をもつて出発した『ダイナミック』創刊号は、その巻頭に「解放の力学」をおいた。それを要約しよう。

近代科学発達の結果、宇宙萬物は超越的の絶対意思によつて支配されているという思想は消え去り、すべての生命は自発的の力として發展するものと考えられるようになった。そして、その生命力は千差萬種の形態をもつて、多元的に發展し、単に空間的に多種であるばかりでなく、時間的にも変化きわまりなき行進を見せている。多元的で個性的な生命力をもつ人間にとつて、「幸福とは、人が自己の欲する一定の目的に向つて進むといふ意識にある。吾等の起源、

吾等の現在、吾等の近き目的、吾等の永遠の理想を達観し、体現して、地球そのものと一体になり、また人類一体の意識をも確かり握り、人類や動物や植物やの各自の生活に適するやうに其環境を分配し整理し、吾等の庭園即ち地球面を耕作し、吾等を圍繞する陸と海と大気とを整頓する。乃ち此の如くにして始めて進歩は行はれるのである」というエリゼ・ルククリュの哲学を紹介しながら、石川は自分の思想を述べる。自己の理想のために環境を分配し、整理することが社会改造であるが、社会改造の第一目的は「自由」の実現である。マルキストは社会改造の事業の重要性には気がついたが、社会改造の第一目的たる「自由」の精神をかなぐり棄ててしまった。

以上は「解放の力学」の要約であるが、この中に、自称「自由社会主義者」⁽¹⁾石川三四郎の思想を構成する、次のことき重要な要素が、あらわれている。

1、近代科学を信頼……超越的な絶対意思を否定する。

2、多元論の立場……石川は創刊号二面において「多元論」を論じており、そこにおいて「各種の生命は、地球上に発生した時から、各々その特殊性を持つてゐたと想像する方が、より論理的である。(中略)この自然観生命観から出発する吾々の社会観に於て、特権階級たる中心とか、中央権力とかいふものはあり得ない。それほど不自然な健全な不合理な存在はない」と述べている。

3、エリゼ・ルククリュへの傾倒……『ディナミック』は「ルククリュ号」(第五号)、「カアベンタア号」(第八号)、「春月号」(第九号)、「アンリネエル号」(第十号)、「生田春月号」(第二十号)、「マラテスタ号」(第

三十六号)の特集をしたが、このうち生田春月⁽²⁾に関する特集を除き、ルククリュ、カアベンタア、アンリネエル、マラテスタの特集をしたところ、石川の思想的傾向がうかがえる。ことにエリゼ・ルククリュとその関係者につき、石川はつぎのようにいう。「革命運動の体験に於て、学問と思想と、その人格とに於て、彼は十九世紀の世界に於ける最大人物の一人である。何の幸ひか、私は此ルククリュ家に居ること七年間、大ルククリュの兄弟達やその後継者ポオル・ルククリュと生活を共にすることが出来た。これから志を立て、ルククリュ兄弟の思想を日本に紹介したいと思つてゐる。そしてその第一着手として、エリゼ・ルククリュ最後の大作「地人論」の翻譯に着手した⁽³⁾」と述べた。

4、マルクス主義への批判……前述の「多元論」においても「相互主義連帯主義に反する強権的社会主義は没落せざるを得ない」と批判している。

石川三四郎は、エリゼ・ルククリュを十九世紀世界における最大人物の一人とたたえる一方、かれ自身の、思想上の最大の恩人としてカアベンタアをあげた⁽⁴⁾。またかれは、暴力否定の無政府主義者アンリネエルから教訓を学びとり、宗教的至誠と深さを持つていたマラテスタを尊敬した。石川は、自己の思想の滋養分を上記の西欧の思想家から吸収していたが、それらの思想家の紹介が性急になされ、あるいは往々にして紹介の域を出ない場合があるため、一、二ではあるが、つぎのような批判もあつた。「リーフレット拜見して感じたことは、どういふところを目安に置いてあれを發行なされるのか判り兼ねました。全然の初歩の人には難かし過ぎるし、さうかといつて分つてゐる人には余りに物足らな過ぎる様に感じます」(『島島英

一・第三号)とか、『ディナミック』は少しも具体的問題を取扱つては
るません。方法論の如きは少しも顧みられてゐません。たゞ同じ様
な空漠とした原理あまりに常識的な原理のみが毎月載せられてある
のみです。……しかし問題は『如何にして!』にあるのです。この
点に於てマルキシズムとアナキズムの差があるのです。『如何にし
て』といふ点が明白でない限り、アナキズムはマルキシズムに劣りま
す」(村上信彦・第十六号)という批判である。

石川は第四号において「自由の要求」といふ論を展開している。
以下、これを要約する。

生命が機械と異なる点は、それが自己の意匠と、その意匠を發展す
る力とを持つているところにある。そのイデエとフォルスとは各個
性において独自のものである。殊に人間において各個生間の相違は
もつとも著しい。従つて一の個生が他の個生を代表するということ
はできない。一人一人の間においてすでにその通りであるから、ま
して一人が多数に代つて事を処したり、一人が多数のために統治し
たりすることは不条理である。生命が自我を実現するイデエ・フォ
ルス(念力)はいかなる外来の妨害力にあつても自我の拡充を停止
することなく、その本来のイデエを歪められながらもなお最後まで
努力を続けるものである。われわれのイデエ・フォルスは、われわれ
の生命そのものである。俺は俺の俺を自由に生活する。それだけな
のである。主義でも理想でもないのである。貴族も平民も、資本家
も、富者も、貧者も、男も、女も、あるいは自覚し、あるいは自覚
せずに、皆その「俺」を生活しているのである。こうして自由の要

求は、国家または社会に対するわれわれの要求ではなくして、われ
われ自身の念力を拡充しようとする本能の叫びに過ぎないのであ
る。されば自由は他人に要求すべきものでないと同時にまた他人に
強行すべきものでもないのである。われわれの自由の要求には闘争
が伴う。しかしその闘争はわれわれ自身の建設のための闘争であつ
て、他を排撃するための闘争ではない。

以上が「自由の要求」の概略である。これによれば、その自由とは
きわめて内面的なものであり、じつは自己以外のなものに対して
も「要求」するものはなさそうである。たしかに、自由にはそのよう
な側面もあるには違いないが、その側面だけを強調することは結
局、人間は心の持ち方次第により、いつでも、いかなる場合にも
自由でありうるということになるであらう。石川も「自由の要求」
の末尾において、「吾々は吾々の意匠に基いて吾々自身を建設し組
織する。それを妨害する種々なる外来物を防除する為に或る闘争が
行はれる」とはいうが、国家、社会に対する要求が過小である点は
国家、社会に対する要求にウエイトを置く者から見ると、あまりに
も観念的、抽象的で、空漠たるものに思えたことでもあらう。

初め『ディナミック』には、自由社会主義あるいは無政府主義の
原理をとくことに力点がおかれた。その原理も、きわめて内面的な
特徴を持つものであつた。しかしながら、『ディナミック』をとり
まく状況が、急激に変化をしていくにつれて、『ディナミック』は
時事問題に無関心でありえなくなる。

第二十五号の「千歳村信」は「満洲の野で日支両国の軍閥が発火

演習を始めた」ことに触れ、第二十六号では「満洲事変」を執筆する。「今日の対満強硬政策が果して吾々日本民族の将来の繁栄の基礎となり得るか。それが問題である。若し今日の対満政策が吾々日本民族の繁栄を約束するものでないならば、今日吾々の兄弟達が惨憺たる犠牲を払ひつことは全然無意義に終りにしないか。(中略)日本の外交は、武力によつてのみ支持せられる日本の外交は、かくて兎も角も成功したと言はれるであろう。吾等の子孫をして永く民族的苦患と恥辱とを管めしむるために」(「満洲事変」)という表現には、戦争に対する批判があるが、それはきわめて控え目である。この慎重な批判にもかかわらず、第二十六号は発禁になつた。

「国防の第一義」を巻頭に置いた第二十八号も発禁になつた。この論説は冒頭に伊太利の革命家マジニの言葉「堅固なる難攻不落の国境を造るよりは、親善なる好き隣邦を造れ」を引用し、書き出される。死霊の跳躍する満洲に鞏固な国境を造らうとすることへの反対の態度が、さきの「満洲事変」よりは鮮明に現われている。

第三十五号も発禁を命ぜられたが、この号には直接「満洲事変」に触れた記事はない。発禁の理由は巻頭の論説「農本主義と土民思想」にあつたのかも知れない。そこには「農本主義は現在の強権的統制をそつとしておいて(中略)治者、搾取者の地位から農民を教化し向上せしめようとする考へから出発したこの思想には無産農民自身の身になつた感情が動いてゐない。(中略)資本と強権との鉄條網をめぐらされて機関銃と爆撃飛行機とに威圧されて、最後の生命線まで逐ひつめられてゐる無産窮民——即ち土民の心情とは縁遠いものだ。

(中略)鉄條網に繞らされた土民はいま機関砲も爆撃機も持つてゐない。絶対絶命の土民はたゞ鍛えられた肉弾を持つてゐるのみだ。土民仲間にあつては「爆弾三勇士」などは常に到処に見出される」とある。

『ディナミック』は、さらに第三十七号が発禁令を受けたが、多分、巻頭文「ギヤング」が原因であろう。「赤色ギヤング」日本共産党の銀行襲撃事件を冒頭にあげ、フアッシュの団体のテロリズムを論じ、さらに満洲事変に言及し、それは、忠勇な軍隊も何時の間にか、資本家活動の露はらひたる以外の意義を持たぬことになり」はしなやかという。ここには、銀行襲撃事件、テロリズム、満洲事変を「ギヤング」として、とらえようとする視角がある。それは同時に、銀行襲撃事件はシカゴのギヤングと些か性質を異にするものがあるという、いまひとつ別の視角をも持つのである。

別の視角というのは、「赤色ギヤング」から、「社会の非常状態を見なければならぬ。ギヤングは捕縛し得る。併しこのギヤングを創造した社会の情勢そのものは到底警察の手で捕縛する訳には行かない」というものである。換言すれば、もし、このギヤングにより、日本の資本と強権とが驕然として悟ればよし、然らざれば秋霜烈日の審判の時が鮮血に塗れて襲来するであろう、ということである。石川は、同様の見地から五・一五事件をも見ていた。「青年士官等の暴拳の如きも彼等自身果して時代を意識したる奮起なるや否やは分らないが、それが時代の反映として或る深大な意味を吾々に暗示することは否めない」、⁽⁶⁾変革が求められているといたいのであ

る。

石川は、変革の担い手として無産政党には期待しない。無産政党は、無産政党という名を僭称する権力亡者の集合体であると石川は考えた。無産政党は、ようやく自覚し、成長してきた無産階級に吸いつこうとする害虫だともいう。⁽⁶⁾

変革は、折から抬頭してきた国家社会主義的運動(内田良平、下中弥三郎らの運動)に期待できないともした。「日本のファッショは一時の風潮に興じた出来心で、そこらに散在する様々な断片的定則を拾ひ集めた政策綱領で一世を動かさうといふのだから堪らない。社会民主主義もだめ、ファッショでもない、共産主義でもない、議会議主義でもない、たゞ一君萬民の天皇政治を行動的国民運動で行ふのだといふ。一体その国民運動は飯を食はずにやるのか。裸体で素足でマラソンのやうに野原でやるのか」と痛烈な批判である。

もちろん、強権主義を拒否する石川は、マルクス・レーニン主義に変革をまかせるものではない。石川はボルシエヴィズムとファッシムはマルクス主義の双生児だと、かれの著『西洋社会運動史』において論じていたが、『ディナミック』においても、同じことをしばしばくり返す。たとえば「マルクス主義の双生児、ファッシズムとボルシエ・井ズムとは、強権的資本主義の延長に過ぎない。ファッシヨの国イタリイに於てもゲ・ベ・ウの国ロシアに於ても、中央権力の独裁が一切の政治組織、経済組織、労働組織を統轄して断じて自由の発展を許さず、また階級闘争を許さない点に於て同一である」⁽⁹⁾とか、あるいはまた「独逸に於てヒットラーが政権を掌握するに至

り、共産党も社会民主党も顔色なしといふ有様に見へる。けれども共産党とファッシヨとは何れも強権主義であり、その闘争組織でも全然同一型のもとに成立するもので、その間に些かも差異がないのである。思想の上から言へば、ボルシエ・井キはファッシヨの先駆を勤めたのである。ファッシヨが勝つてボルシエ・井キが負けたのではない。ボルが露はらいたる役目を終へて、その後にはファッシヨは乗り込んで、だのである。党派の関係から見ればボルは破れたに相違ないが、思想の上から言へばボルは大役を成就した⁽¹⁰⁾といふのがそれである。強権主義を目標とするマルクス主義は、絶対的自由を目ざす石川にとつて承認しえないものである。「レーニンはプロレタリア革命を高調しながら到頭プロレタリアを踏台にし社会主義の葬式を行つた⁽¹¹⁾」⁽¹¹⁾といふのである。

石川三四郎は、昭和五年夏頃におけるわが国の社会運動を左の六グループに大別した。⁽¹²⁾

- 一、弁証法的階級闘争説——非合法的革命運動を主張するもの(秘密結社共産党)
- 二、弁証法的階級闘争説——合法的にして革命臭き議会議主義(大山一派)
- 三、弁証法的階級闘争説——合法的議会議主義(大衆党)
- 四、階級闘争否定——議會主義、改良主義(社民党)
- 五、階級闘争否定——行動美的暴力主義(伊国と日本のファッシスト、急進党)
- 六、階級闘争否定——暴力政策議會政策並用(既成政党、官僚派、建国会、国粋会ファッシヨ中の一派、其他)

石川は右のごとく社会運動の党派をあげたあと、そのすべてが、いずれも強権主義であるという点においてかわりがないとし、日本には社会運動があつても解放運動はないと断言した。それでは、日本を解放しうる運動は全くないというのであろうか。そうではない。「今日の世界に唯一の解放運動として存在するのは、アナルシスト(非暴力的個人的な)及びサンジカロ・アナルシスト(即ち革命的アナルシスト)の運動である」という。石川はアナルシストの立場に立つ者であり、『ディナミック』はその思想を表現したものであつた。

- (1) 石川三四郎「カアベンタアを想ふ」(第八号・昭和五年八月一日)
- (2) 生田春月は明治二十五年、鳥取県米子市に生まれた文学者で、石川三四郎の思想に交響していた。昭和五年五月十九日、瀬戸内海へ投身自殺した。石川は春月を「巨匠春月」と呼んだ。
- (3) 「千歳村信」(第五号)
- (4) 「私をして今日、一個独立の思想人として築き上げてくれた人々は殆ど無数にあると言つて可い。併し、私をして自由社会主義者として独立の生活を樹てさせてくれたものは、バクニンでも、クロボトキンでもなく実にエドワード・カアベンタアであつた。私はカ翁のものを読む前に、バクニンやクロボトキンを読んだ『パンの略取』も『神と国家』も、私の心を引き付けてはくれたが、思索上の空虚を充足してはくれなかつた」(前掲「カアベンタアを想ふ」)
- (5) 「兇悪な時代相」(第三十二号)
- (6) 「無産党の合同」(第二十二号)
- (7) 「日本ファッショの将来」(第三十一号)
- (8) 「千歳村信」(第二十一号)

- (9) 石川三四郎「第三国の建設」(第二十二号)
- (10) 「ファッショ勝利の意義」(第四十三号)
- (11) 石川三四郎「自由社会の理想」(第十一号)
- (12) 右同
- (13) 右同

三、『ディナミック』総目次

第一号(十一月号)

昭和四年十一月一日発行

解放の力学	ブルウヅン ⁽²⁾
力学の第一義	
多元論	
フライラント	石川三四郎
フライゲルト	生田春月
ミノリテの歌	堅三
同志通信	望月百合子
アンリネヘル ⁽¹⁾	不尽
犬と人間	石川
読んで下さる方へ	百合
編集後記	
第二号(十二月号)	
昭和四年十二月一日発行	
レーニンとの最後の会話	クロボトキン
機械	
政治のからくり	生田春月

都会と農村

岩壁

基督信者? エリコ・マラテスタ

ディアレクテックとダイナミック

小川未明氏より

西村陽吉氏より

楽園喪失

千歳村信

石川三四郎

中西悟堂

百合子訳

江渡狄嶺

西村陽吉

石川・百合・奥谷生

第三号 (一月号)

昭和五年一月一日発行

一九三〇年

糞くらへ

農村の荒廃

海

誌友通信 (三部豊氏・正木金吾氏・高畑徳夫氏・五十里幸太郎氏・

新居格氏・延島英一氏)

都市の崩落

寄贈された詩集から (宣言・吉地昌一氏『萌えいつる草』、失業者の

汗・大島庸夫氏『烈風々景』、百姓の詩・猪狩満直氏『移住民』)

神は悪なり

千歳村信

共働運動研究会の創立

生田春月

石川三四郎

岡本 潤

西村陽吉

石川

石川

渡辺幸平 奥谷松治

第四号 (二月号)

昭和五年二月一日発行

エリゼ・ルククリユ

虚無

人間回復の日へ

自由の要求

合言葉

いざ後継がん

誰よりも自分が知る

宇宙的ダイナミズム

次号はルククリユ号

遠近の友より (平林定夫氏・加藤一夫氏・藤登勝氏・久保田良一氏・

高群逸枝氏・張×氏)

千歳村信

中西悟堂

石川三四郎

岡本 潤

生田春月

小川未明

尾崎喜八

石川生

第五号 (三月号)⁽³⁾

昭和五年三月一日発行

百年祭

エリゼ・ルククリユを想ふ

ルククリユ小伝

吾等の光

エリゼ・ルククリユと暴力問題

著作年表

ルククリユとアン・リネール

ルククリユ兄弟の学問の価値

エリゼの死

文は人なり

ルククリユ兄弟の影響

エリゼ・ルククリユ

生田春月⁽⁴⁾

石川三四郎

百合子

アン・リネエル

石川三四郎

ポオル・ルククリユ

ポオル・ルククリユ

尾崎喜八

エム・ピエロ

新刊紹介(鐵田研一氏著・無産農民の陣営より、尤田卯吉著・土の

芸術と土の生活)

千歳村信

石川生、百合子

第六号(四月号)

昭和五年四月一日号

保守

(地人論まり)

代議政治

地人論に就て

深夜に歌ふ

基督教と無政府主義

『牧師ロツに与へた手簡』(一九〇四年)

病床偶感

遠近の友より(岡本潤氏・上司小剣氏・麻生恒太郎氏・宮里清春氏・

武井文雄氏・丙希可氏)

千歳村信

受贈書紹介(黒い女・高群逸枝氏著、女流作家群像・生田花世氏著、

馬糞と星・田中清一氏著、婦人戦線、黒戦、黒旗、芸術と自由、彈

道)

第七号(五月号)

昭和五年五月一日発行

五月一日

クロボトキン

エリゼ・ルクリュ

石川三四郎

石川生

生田春月

エリゼ・ルクリュ

百合子

石川生・百合

エリゼ・ルクリュ

エリゼ・ルクリュ

ルイズ・ミッシェル(6)

初期の五月一日

百合

受贈書紹介(一)死刑囚の思ひ出・古田大次郎著、芸術と自由、婦人戦

線、黒戦、瀾葉樹、緒士、短歌建設、童話の社会、弾道、焰、子供、

自由聯合新聞、熔鉱炉、黒潮時代、自由聯合の組織と運動精神・全

国労働組合自由聯合協議会、自由聯合運動、真理なき町・宮本武吉、

学校詩集)

千歳村信

石川

第八号(六月号)

昭和五年六月一日発行

カアペンタアを想ふ

カアペンタアを想ふ

カ翁小伝

謙讓——カアペンタアを思ふ——

カ翁著作目録

千歳村信

カアペンタア

石川三四郎

生田春月

南條芦夫(7)

石川・百合

第九号(七月号)

昭和五年七月一日発行

義憤

生田春月

死

巨匠春月

逝ける春月君

心からの手向

麻生恒太郎

石川(7)

新居 格

尾崎喜八

晩秋——この一篇を亡き春月の霊に捧ぐ——

春月君の死

五月の朝——生田春月氏を弔ふ——

生田春月氏を憶ふ

自由人の死

生田春月氏に

花を一輪

春月を偲ぶ (尾崎喜八氏、麻生恒太郎氏、大島庸夫氏、西村陽吉氏、

小川未明氏、奥谷松治氏、江渡狄嶺氏)

千歳村信

小川未明

西村陽吉

佐藤信重

大島庸夫

中西悟堂

百合

石川

第十号 (八月号)

昭和五年八月一日

アン・リネエル——「在巴里、椎名其二君の手簡の一節」——

アンリネエルとガンヂ

アンリネエル寸感

セブリース——『私信の一節』——

遠近の友より (備前文次氏、和田伝氏、佐藤信重氏、

小池英三氏、猪狩満直氏、吉江喬松氏、有賀雅氏)

千歳村信

アン・リネエル

石川三四郎

百合

在巴里 椎名其二

花島克己氏

石川生

第十一号 (九月号)

昭和五年九月一日発行

エリゼ・ルクリュ

自由社会の理想

石川三四郎

労働組合の使命

遠近の友より (奥西吉太郎氏、平田千代吉氏、松崎武雄氏、唐沢憲一郎

氏、長谷川光二氏、高田晃氏)

ジャン・グラヴ——『私信の一節』——

千歳村信

クロボトキン

在巴里 椎名其二

石川生・百合

第十二号 (十月号)

昭和五年十月一月発行

無政府主義と私有制度及び賃銀制度

歴史の教訓

遠近の友より (竹内英次郎氏、大石正字氏、長谷川光二氏、金永棋氏、

三浦精一氏)

フロラ・トリスタン——『私信の一節』——

千歳村信

スチルネル

石川三四郎

エリゼ・ルクリュ

在巴里 椎名其二

石川生

第十三号 (十月号)

昭和五年十一月一日発行

豊作国の餓死

九十九と一

建築工

マラテスタの名言

遠近の友より (荏静氏、村上義博氏、不木哲氏、塩長五郎氏、阿部熊

治氏、藤田恒夫氏)

千歳村信

カアベンクア

故生田春月

石川三四郎

アレックス

第十四号 (十二月号)

昭和五年十二月一日発行

オーギュスト・コント

吾等の事業
無政府主義とサンデカリスム

ジャン・グラアヴ

石川附記⁽¹⁰⁾

木立

イチカバチカ

便利源蔵⁽¹¹⁾

望月百合子

働きつゝある失業者

猪狩満直

遠近の友より (竹内伸之氏、古小路正義氏、藤田恒夫氏、松村元氏、

岡田寿三氏、安××氏、宮里清治氏)

石川生

第十五号 (二月号)⁽¹¹⁾

昭和六年一月一日発行

マルクスへの手紙

ブルウドン

謹賀新年

石川三四郎・望月百合

国家の行方

歴史上に於ける相互主義の地位

石川三四郎

欺されるな

望月百合子

金がなくなれ!!

西村陽吉

遠近の友より (水島小一氏、加藤弘造氏、山本剛氏、杉原邦太郎氏)

千歳村信

石川生

第十六号 (二月号)

昭和六年二月一日発行

マラテスタ

三人問答

千歳村信

石川生

遠近の友より (村上信彦氏、小野寺実氏、山川時郎氏、有田永一氏、

植田信夫氏、太田正治氏)

第十七号 (三月号)

昭和六年三月一日発行

デイオゼネス

社会的分業論

石川三四郎

千歳村信

石川生

第十八号 (四月号)

昭和六年四月一日発行

バクニン

暴力沙汰の流行

フランツエスコ・ゲンゼイ——『ロオド・ツウ・フライダム』より⁽¹²⁾

エー・ベルトラン

青柳生訳

財布が空の日の詩

磯村利一

木、動物、人間

百合子

遠近の友より (備前文次氏、山川時郎氏、南條蘆夫氏、宮川三千蔵氏、

長谷川光二氏、岡田寿三氏、奥西吉三郎氏)

千歳村信

石川生

第十九号 (五月号)

昭和六年五月一日発行

エリゼ・ルクリュ

吾等の投票——白票を投ぜよ——⁽¹³⁾

自由社会主義と強權社会主義

単に男対女の感想

遠近の友より(長岡孝一氏、生島繁氏、猪狩満直氏、李迷鳥氏、松村元氏、小池英一氏、杉原邦太郎氏)

千歳村信

石川三四郎

百合子

第二十号(六月号)

昭和六年六月一日発行

春月

春月を想

自由の使徒

孤峯春月の魅力

彼の情熱

春月の一信書

春月さん

断片的思想

一年前の日

断想——生田春月氏一週忌に際して——

想ふ

ハンストの真相

千歳村信

第二十一号(七月号)

昭和六年七月一日発行

総崩れ

ブルウドンとルクリュ

反響(水夫、久の松氏、伊藤房男氏、×信達氏、○○天氏、別宮生氏、長尾宏也氏、武井文雄氏、長谷川光二氏、阿部八衛氏)

獄中より(15)

壁

千歳村信

第二十二号(八月号)

昭和六年八月一日発行

老子

死刑囚最後の手紙——一九二七年八月十八日チャールスタウン・ステエ

ト監獄にて——

無産党の合同

野狐弾

第三国の建設

ルクリュの個人観

千歳村信

第二十三号(九月号)

昭和六年九月一日発行

圓覚経

ブラツク チエンパ(17)

クロポトキンの学説上の誤謬

獄中だより(逸見吉三、後藤廣教)

機械的物力と自発的意志力

双刃の劍

エリゼ・ルクリュ

利(14)

兵隊の詩

中室

反響 (松村元氏、大原義栄氏、李迷鳥氏、川口清氏、瓜生伝氏、久の

松氏、田中正一氏)

千歳村信

石川生

第二四号 (十月号)

昭和六年十月一日発行

エリゼ・ルクリユ

進行中の西班牙革命⁽¹⁸⁾

柵の彼方へ

中西悟堂

新美学

南條蘆夫

受贈新聞雑誌 (中外日報、黒色労働新聞、冬の土、創生時代、思想批判、新興文学)

千歳村信

石川生

第二十五号 (十一月号)

昭和六年十一月一日発行

クロポトキン

墨子非戦論⁽¹⁹⁾

戦争と軍隊⁽²⁰⁾

神農の世

ルクリユ

裸体美論

受贈雑誌瞥見 (海図、黒戦、農民、芸術共和国、農本社会)

百合子

『炭坑夫』

石川

千歳村信

第二十六号 (十二月号)

昭和六年十二月一日発行

バベウフ

暴力と戦争

国際反戦聯盟大会の宣言

法域寺にて

大島庸夫

鏡

磯村利一

満洲事変

石川三四郎

反響 (勝南寺巖氏、村上信彦氏、長谷川光二氏、更科源藏氏、杉浦栄氏)

千歳村信

百合子

十日間走り書

第二十七号 (一月号)⁽²¹⁾

昭和七年一月一日発行

フウリエ

共学社一同

謹賀新年
如何に祖国を愛すべきか
本紙前号の発禁

農村の兄弟に

エリゼ・ルクリユ

『レベイエ』の同志の返答

『鉄』を讀みて

百合子

花井博士を想ふ

石川生

千歳村信

第二十八号 (二月号)

昭和七年二月一日発行

バクニン

右翼取締
戦争に非ず

国防の第一義
フアツシヨ運動

嘘くひ動物

国体の精華

農村の兄弟に(承前)

本紙の合本

国家社会主義

日染の兄妹再起す!!!

戦線情勢(神戸合成に弾圧、自協系北部消費組合、東洋印刷の争議)

北平より

千歳村信

エリゼ・ルクリュ

ジャック・ルクリュ

第二十九号(三月号)

昭和七年三月一日発行

社会美学としての無政府主義

又々発禁

反響(前田泰男氏、嵯峨山與里氏、松田等氏、小池○○氏)

千歳村信

断片

ギユイヨオ

石川三四郎

南條蘆夫

第三十号(四月号)

昭和七年四月一日発行

社会美学としての無政府主義

又々発禁

反響(前田泰男氏、嵯峨山與里氏、松田等氏、小池○○氏)

千歳村信

断片

第三十号(四月号)

昭和七年四月一日発行

同志ムニイ

エリゼ・ルクリュ

『ディナミック』総目次と解説

右翼取締

戦争に非ず

上海は西洋だ

フアツシヨ運動

スペイン社会党

世界大戦の価

権藤成郷氏

昨年不幸

動熊社会美学としての無政府主義

反響(伊藤房男氏、田中正一氏、二宮頓氏、長谷川光二氏)

受贈雑誌(国民解放、農本社会、山娘、盆地)

千歳村信

石川三四郎

第三十一号(五月号)

昭和七年五月一日発行

日本フアツシヨの将来

春月追慕の詩——彼の生地を訪ねて——

春月とケエテ

生きてゐる春月

時代人の詩へ

晩歌

反響(岡田寿三氏、南條蘆夫氏、藤田恒夫氏、松村元氏)

社会思想と近代生活(井藤半弥氏著)

渾沌の児(松尾啓吉氏著)

ルンペン時代(中本弥三郎氏著)

生田春月

佐藤信重

大島庸夫

百合子

中室貞重

大峰雪夫

千歳村信

石川生・百合子

第三十二号 (六月号)

昭和七年六月一日発行

クロボトキン

兇悪な時代相

天皇政治の独占

民主政治

インチキ学校

上海の爆弾

不随症状

統制経済

国利と民福

病菌の挙国一致

愛国心

ビクトル・ユウゴオ、不尺生訳

愛国心及び殖民生活——『愛国心、殖民生活』序—— エリゼ・ルクリュ

パタの流刑者を救へ

C・G・T・S・R

反響(×野氏、長谷川光二氏、西田敏夫氏、南條蘆夫氏、×田氏、

墨子氏)

千歳村信

第三十三号 (七月号)

昭和七年七月一日発行

帝王世紀

自力を以て更生せよ

西班牙アナルシストの活躍——ジャングラアウのパンフレットより——

受贈新刊書(詩人春月を語る・大島庸夫氏著、ゆれる街路樹・林久一氏歌集、跛の乞食・橋本貞吉氏著、日本自協の話)

無題

磯村利一

私の守唄

百合子

反響(×村利一氏、杉原××氏、李哲氏、久本今作氏)

日記の一日

石川・百合子

千歳村信

第三十四号 (八月号)

昭和七年八月一日発行

田中正造翁日記

政府最大の義務

サンヂカリスムとアナルシスム——一九三二年四月二日発行レヴヱイ

ユ・アナルシスト誌より——

百合子訳

受贈新刊書(米沢順子詩集・米沢順子氏著、美子恋愛詩集・英美子氏著、東洋の春・英美子氏著、虫・鳥と生活する・中西悟堂氏著、飢

餓線の彼方・中野時雄氏著)

農村はあへぐ

岡田寿三

新しい世界

百合子

誌友の声(備前×次氏、西田×雄氏、松岡×氏、安岡黒村氏、南條蘆

夫氏、中××重氏、安川三郎氏、弘田×氏、長谷川×二氏)

日記の一日

百合子

千歳村信

石川生・百合子

第三十五号 (九月号)

昭和七年九月一日発行

歴史現象の多元性

鎮

有田永一

新刊書紹介(アナキズム・ヘンマ・ゴールドマン著、山下一夫氏

訳)、南海黒色詩集、冬の土)

千歳村信

石川・百合子

第四十一号(三月号)

昭和八年三月一日発行

歴史動態の多様性

千歳村信

モンテスキュー

石川

第四十二号(四月号)

昭和八年四月一日発行

コスモポリトの使命

西班牙革命

誌友通信(×田×一氏、伊藤房男氏、K・川口氏、×乃天氏、長谷川

光二氏)

白耳義に於ける非軍国主義

兵役拒否ハンストの勝利

不気味なる静謐

受贈新刊雑誌(罰当りは生きてゐる・岡本潤氏著、友と語る・石川主

計氏著、茜草・今井邦子氏著、春の土・生田花世著、東洋学苑、新

興弘教、新文学苑、破烈以前、我等、教学新聞其他)

千歳村信

アン・リネール

有田永一

石川

第四十三号(五月号)

昭和八年五月一日発行

フアツシヨ勝利の意義

歴史現象の社会生理的批判

受贈新刊書(農本主義(理論篇)・加藤一夫氏著、現代都市文化批判・

伊福部隆輝氏著、最新思潮展望・加藤朝鳥氏著、白い眼・倉田潮作

品第二輯)

古事記神話の研究

千歳村信

テーヌ

石川

石川生

第四十四号(六月号)

昭和八年六月一日発行

ゴオルドスミス女史の死

国民の職分を論ず——『学問のすゝめ』より摘録

歴史——哲学序論

歴史——新著『歴史哲学序論』より——

人道的科学——所謂『誤訳』に就て

千歳村信

ルクリュ

福沢諭吉

石川

石川三四郎

石川

石川

第四十五号(七月号)

昭和八年七月一日発行

私は平静であり得ない!——『トルスタヤ女史の撤』——

共産党の転向

トロオ

所謂『誤訳』に就て

延島英一

千歳村信

石川・百合子

紙友通信(南條蘆夫氏、伊福部隆輝氏、中西悟堂氏、長谷川光二氏、

石××郎氏、K・川×氏)

石川三四郎

第四十八号(十月号)

昭和八年十月一日発行

放浪八年記

再び入道の科学に就て

新刊書紹介(農に生きる・木村荘太氏、近代学校・渡部榮介氏訳、社

会詩集・故生田春月、苦惱・堀江末男氏詩集)

石川

魂の転向
ババの旅立ちに際して
報に接して

維持会員を募る

磯村利一

第四十六号(八月号)

昭和八年八月一日発行

アンリネール

はなむけの言葉(中島清一氏、長谷川氏、逸見吉三氏、岡田寿三氏、
木村荘太氏、島中雄三氏、岡本潤氏、渡辺幸平氏、竹内てるよ氏、嶽
南・川口氏、有田氏、更科氏)、

望月百合子

『自由を』の叫び

紙友通信(薄井計雄氏、松田利勝氏、東正男氏、東井信氏)

中村星湖氏私信

取揚げるな

ある自由人の死に

南條蘆夫

『古事記神話の新研究』を讀みて

安岡黒村

知識の無常⁽²⁷⁾

石川さんの花道

上司小剣

第四十七号(九月号)

昭和八年九月一日発行

白居易

石川生

石川生

石川三四郎

創刊号前後の追想

旅行事情

民族主義運動

受贈新刊書誌(三沢村日記・室伏高信氏著、アナキズムと民衆文学、

小野十三郎氏著、文学通信)

後記

第五十号(十二月号)

『ダイナミック』絵目次と解説

一自由人の放浪記より

奥谷松治

望月百合子

中村星湖

大島庸夫

生田春月

百合子

『ディナミック』総目次と解説

昭和八年十二月一日発行

ウキリアム・モリス

旅信 (第一)

石川さんをお見送りする

中西悟堂

純勞・大久保氏、高知・一読者、備前文次氏

百合子 (29)

店頭雑感

百合子

後記

百合子

第五十一号 (二月号) (30)

昭和九年一月一日発行

「土の権威」より

言語

人と本

旅信 (第二)

木村莊太

恋慕太陽

百合子

後記

百合・時雄

誌友近信

百合子

川×清氏

第五十二号 (二月号)

昭和九年二月一日発行

(無題) (31)

秦始皇論

石川三四郎

百合 (32)

旅信

北平に来て

誌友通信 (中村章子氏、東井信氏、竹内てるよ氏)

百合子

第五十三号 (三月号)

昭和九年三月一日発行

始皇帝の事業

石川三四郎

東洋の研究

石川

後記

百合

第五十四号 (四月号)

昭和九年四月一日発行

東洋社会党

エリゼ・ルクリュ

『東洋社会党』の思想に就いて——山路、吉野、加田諸氏の説を駁す——

石川三四郎

歴史研究

奥谷松治

食へる詩

石川

私の頁

上條一夫

百合子

第五十五号 (五月号)

昭和九年五月一日発行

全体主義と日本精神

石川三四郎

千歳村信

国語

支那民族『后土』の礼拜

支那民族『后土』の礼拜

私の頁

百合子

百合子⁽³⁴⁾

第五十六号 (六月号)

昭和九年六月一日発行

ルクリユ

石川三四郎

石川

回顧五年
千歳村信

国語

東洋豪傑気質
千歳村信
春月会の創立
人生の横顔

第五十七号 (七月号)

昭和九年七月一日発行

ルクリユ

石川三四郎

石川三四郎

石川

磯村利一

百合子

コスモスの市民

『人体的国体論』を評す

千歳村信

直さん

雑草

第五十八号 (九月号)⁽³³⁾

昭和九年九月一日発行

カアペンター

石川三四郎

石川

百合子

浅田一

大乘無政府観
千歳村信
療養所の夢二さん
『人体的国体論を評す』に答ふ

『ディナミック』総目次と解説

第五十九号 (十月号)

昭和九年十月一日発行

(1) 第一号から第四号までは第一巻となつてゐる。その後、第五号から第十四号までが第二巻、第十五号から第二十六号までが第三巻、第二十七号から第三十八号までが第四巻、第三十九号から第五十号までが第五巻、第五十一号から第五十九号(終刊)までが第六巻である。

(2) 巻頭題字の右にブルウドンの短文が掲載されているが、題がないので「ブルウドン」とだけしておく。以下同様の形式をとる。

(3) エリゼ・ルクリユ (Jean Jacques Elisee Reclus, 1830~1905) 特集号である。八頁からなる。なおこの号から第二巻になる。

(4) 第五号第一面には三段ぬきの、晩年のエリゼ・ルクリユの写真が掲載されている。

(5) 第七号第一面の余白を埋めたもので、題名はない。

(6) 第八号第一面の中央には三段ぬきのエドワード・カアペンターの写真が掲載されている。この号は Edward Carpenter (1844~1929) 号である。

(7) 第九号第一面には生田春月の写真と石川三四郎への遺書の写真が掲載されている。この号は自殺した生田春月号である。

(8) 第十号第一面中央には HANRYNER の肖像木版の写真が掲載されている。

- (9) 第十三号第一面、故生田春月の詩のあとに五行を費し、この詩が生田より生前に書き送られたものであることが「編輯者」名で付け加えられている。
- (10) 前文ジャン・グラーヴのものについての解説文である。
- (11) 第十五号(昭和六年一月一日発行)より第三巻になる。
- (12) 本訳文の末尾に「編輯者」名でゲツヂイの近況が附加されている。そのあとに「老子」の短文が埋め草に用いられている。
- (13) 本論文の末尾に四行、スベイン共和制の樹立への寸感が埋め草的に刻まれている。
- (14) 「総崩れ」の末尾に埋め草的に「利一」の三行詩がある。
- (15) 「ブルドンとルクリュ」の末尾に埋め草的に「磯村」の詩を六行使っている。
- (16) 第二十二号第二面中央には「国威宣揚満鮮踊り」と題する日章旗をかついだ骸骨の漫画が三段ぬきで掲載されている。
- (17) 第二十三号第一面中央には三段ぬきの無産政党批判の漫画が掲載されている。
- (18) 第二十四号第一面下中央に二段ぬきの「アナルンイ」の漫画が掲載されている。
- (19) 墨子「非政」を宇野哲人著『支那哲学史講話』の中に要約したものを無断拝借したと前書きがある。
- (20) 第二十五号第一面の埋め草で莊子の盜跖篇より引用したとある。
- (21) 第二十七号(昭和七年一月一日発行)より第四巻になる。
- (22) 第三十六号中央に二段組みで「イラテスタの最近の小照」を掲載してゐる。この号は Enrico Malatesta (1854—1932) の特集号である。
- (23) 本文の末尾に次の文がある。「石川曰、細屋氏といふは仮名らしい。僕の雑誌に僕をはめた文章を寄せてはおべつかに聞へると思つて、変
- 名せられたのであらう」
- (24) 発禁されたことを告げる後尾に「百合子」名で「発禁にそなえるため、本社の刊行物は一切前もつてお申込みを乞ふ」という三行文がある。
- (25) 第三十九号より「第五巻」となる。
- (26) 恒例の年賀詞にあたる短文が巻頭に「共学社」から掲載されている。
- (27) 「知識の無常」のあとの埋め草に、石川三四郎の三行詩がある。
- (28) 突然に三人の私信が掲載されている。
- (29) 第五十号中央二段組みで石川が外国旅行に出発する前に大阪で撮つた写真が掲載されている。
- (30) 第五十一号より「第六巻」となる。
- (31) ルクリユヤクロボトキンの文章を掲載してきた場所に無題、無署名にて八行の小文が掲載されている。
- (32) 望月百合子の埋め草的文章で題は無い。
- (33) 八月号は休刊。創刊号以来、初の休刊である。
- (34) 題なく埋め草。